

映画や演劇、美術や音楽が溢れるこの街で
私はもう一度誰かと出会い直す。

のきした journal



All human beings free from fear and want,
and enjoy freedom of expression, speech and belief.



のきしたに関わるメンバーの声、のきしたに集まるみんなの言葉。
世界が見過ごしてしまいそうな、この日常の景色を世の中に届けたくて。
みんなの表現の場として「のきしたジャーナル」を創刊します！

2023.FEB / TAKE FREE

発行：のきした

about NOKISHITA



風を読み、人を読む

年末から「そよそよ族伝説」という別役実の童話を読んでいる。言葉をもたず、風を読み、水を読み、空を読み、歌を歌う種族の話。両親が50年前に“予兆”という劇集団で初めて上演した演目もそよそよ族の戯曲だった。不思議な巡り合わせでこの童話と出会えたのは、犀の角でやどかりハウスが始まったからで、言ってしまうとコロナが起こったからだった。

やどかりハウスにやってくる人々は、日常の関係性のなかで傷ついたり、息がしにくくなった心身をひとときのあいだ休めに来る。彼女・彼らの声は言葉にならない問いとして犀の角の空気に溶ける。劇場を歩き交う街の人や旅人たちもまたその空気を吸い交わりながら呼応していく。

その問いと呼応の間（あわい）で、私がそよそよ族と再会のような出会いをしたように、触れてこなかった世界との出会いがそこかしこで起こっているように思えてならない。言葉をもたないやりとりが、言葉でできた世界を変容させていく。

やどかりハウス / 秋山紅葉

東京都出身、長野県小諸市在住。精神保健福祉士、公認心理師。青年期に山谷のNPOでインターンをし、吉原（元遊郭）に位置する女性シェルターで働きながら資格を取り、2009年より精神科病院のソーシャルワーカーとして活動。2020年に始まった女性が雨風しのぐ宿として駆け込めるやどかりハウスの相談員を担う。NPO法人場作りネット理事。NPO法人らしく理事。

やどかりハウスとは・・・

上田市の民間文化施設「犀の角」と生活相談を行うNPO「場作りネット」が協働で運営する“雨風をしのぐ宿”です。犀の角ゲストハウスの女性専用ルーム(母子も可)が500円で利用できます。息抜き出来る宿がほしい人、昼間ひとりになりたい人など、お気軽にご活用ください。(男性も空き状況によりご利用可)



ひらいてむすんで

基本にあるのは「お金ではなく、時間という単位で、与えること・受け取ることを通じて、持ちつ持たれつ関係を広げていくこと」。この説明でピンときたら、ぜひ《時間銀行ひらく》の扉をたたいてみてほしい。

今のところは、週1回くらいのペースで犀の角に集まって、一緒に手を動かして何かを創り出したり、誰かが得意なことを教えてもらったり、何気ないおしゃべりを楽しんだり……同じまちに暮らす年齢も性別も背景も異なる人たちが出会い直し、共に過ごす時間を重ねている「だけ」だけれど、その積み重ねのなかで感じてきたのは、「与える」だけの人も「受け取る」だけの人もいなくて、小さな交換が無数に生まれているということ。ゆるい結び目みたいな「持ちつ持たれつ関係」がすでにスタートしているってこと。

時間銀行 ひらく / 野川未央

1982年生まれ。NPO法人APLA事務局長。東南アジア島嶼部での農を軸にした地域づくり、海を越えた交流や学び合いの場の創出を続けてきている。2021年から上田市に生活の拠点を移し、仕事の拠点の東京と行き来しながら、のきたでは「時間銀行」の発起人(?)として楽しく試行錯誤中。

時間銀行とは・・・

時間銀行の基本にあるのは、お金ではなく、時間という単位で、与えること・受け取ることを通じて、持ちつ持たれつ関係を広げていくこと。まずは参加メンバー同士の個別のやりとりではなく、毎週火曜日(13時~16時)に海野町の犀の角で時間を共有する場を「ひらく」ところからスタートしています!



のきしたの最初の取り組みであるやどかりハウスは1年間で250泊100名以上が利用した。家庭内の抑圧から逃れてくる人が最も多く、子育てや介護(のようなもの含む)の行き詰まりも多かった。その本質を見れば社会の権力構造やヒエラルキー(稼げる人間が偉いなど)がそのまま家庭の中に持ち込まれており、それが個人の中に押し込められ、逃げ場を無くしていた。私たちがやってきたことは、その押し込められたものを外(街の中や人々の中)に開こうとしたということだったように思う。隠れている問題と街が出会うことで、お互いに新しい身体性を手に入れようとしていた。

だからこそ、のきしたは困り事が集まりだしても暗くはならず、むしろどんどん明るくなっていった。コロナ感染拡大のため集まれない、となれば「集まれないなら開く」をかけ声に、芋を大量に集めリアカーを引いて白塗りで音を鳴らしながら配り歩いたり。街中に子どもたちの部活動を作ってみたり(イロイロ倶楽部)、お金ではなく時間を通貨に繋がる場(時間銀行ひらく)を毎週ひらいたり、盆踊りにトークイベントに自助グループ(天気の子の会、いどばた)に、その活動は自由にどんどん広がっている。今年の年末年始には餅つきや駅伝(乗り物でも可)を開催した。食料を募れば大量に届くし、「うえだ子どもシネマクラブ」や「リベルテ」をはじめ、共に軒を並べながら活動を共にする団体も増え、軒が広がってきているような実感もある。その軒の下で私たちは自分たちの身体性が変わることをおおいに楽しんでいるのだと思う。

しかし私たちはおそらく楽観主義者というわけではない。暴力や支配や無力化される個人。暗いものと触れない日はないし、怒りや悲しみに悶え苦し

む時もある。しかしそうした現実から目を背けることなく出会うことができる安心感のようなものが、少しずつ芽生えてきているのではないかと思う。

「ホームレス」が「苦労人のおっちゃん」に変わった時、家出てきたお母さんが涙を流した時、ヘンテコなパレードが発生した時、思いつきの駅伝が楽しめた時、この街が自分の街だと思え、うれしい。エネルギーや優しさが湧いてきて自然と笑顔になる。そうした「命が喜ぶ」ような一つひとつの瞬間を共有する時、私たちは「出会い直した」と言っているような気がする。それは私たちが長らく忘れていた何かを思い出そうとしているようでもある。

私たちはこれからも社会を覆う暗い影に気が付きながら、それでも思いつきこの「出会い直し」という身体性の変化を楽しむだろう。それがどのような意味があり、どんな成果を残すかなど本当はどうでもいい。暗い闇の中に居ながらも、私たち自身の命が喜ぶ瞬間を見出し、一瞬でも光ってみせたい。そしてその光を100年後の誰かに届けたい。その時代がどんな時代であろうとも、その誰かもきっと私たちと同じ願いを持っているはずだ。

私たちはきっと、生き延びたいのではない。

生きたいのだ。

NPO法人 場作りネット / 元島 生

NPO法人場作りネット副理事長。4児の父。疲れやすい多動。内向的なアウトドア派。法人として年間10,000件の困り事と出会う。そこで見えることを「場(社会変革のプロセス)」に変換する仕事をしている。



コロナ禍によって顕在化した劇場への問い

コロナ禍によって、劇場を取り巻く状況は大きく変化した。演劇作品が世の中において独立的に存在し、当たり前のように観客が見ることが、確かにコロナ前まではあったが、コロナ禍を通してこのような状況は過去のものになってしまったように思う。

人が集まらなくなった時、一体どんな存在理由が劇場にはあるだろうか。根源的な問いが目の前に突きつけられた。よく考えてみると、この問いはコロナによって初めて目の前に現れたかのように見えて、「犀の角」オープン当初にも同じ問いがあったことを思い出す。我々は上田にいわゆる「劇場」的なものを創ろうとしているのか、あるいは、言語化し得ない「何か」を創造したいのか。整理がつかないまま走り始め、忘れかけていた問いがコロナによって思い起こされた、という言い方のほうが正しいかもしれない。

「のきした」は、コロナ禍によって社会状況が悪くなり困窮者が増えたことをきっかけに上田市に生まれた有志による助け合いの取り組みで、まさに空っぽになった劇場で何をすべきか悶々と悩んでいた頃に、ぼつぼつと集まってきたアーティストや仲間たちと交わした雑談の中から生まれた。困りごとを抱えた女性が500円で泊まれる宿「やどかりハウス」や「おふるまい」もそれらの取り組みだ。

結果として、演劇やダンスとは直接関係のない人々が劇場に「居る」ようになった。劇場にとって極めて大きな変化だった。コロナによって劇場に空白ができ、その空白を埋めるかのように現れた、生活をする上で困難を抱える人たち。何かを観たり、聴いたりしようとして集まって

きたのではない、でも、何かを求めているかのようにも見える人たちが、今、目の前にいる。

現在の犀の角は、毎日のように「のきした」関係者とアーティストとの集まりや、「やどかりハウス」利用者との面談が行われ、時には利用者が誰かとピアノの伴奏で歌を歌っていたり、アーティストと話し込んだりしている。いわゆる括弧つきの演劇公演は少なくなってきているけれど、人が集まり、目の前の問題と向き合いながら、立場を超えてお互いが生きやすくなるような工夫が「のきした」を中心に行われている。それらは相当の熱量である。これらを広義の演劇行為と言ってもよいだろう。時代が大きく変化しつつある現在において、現実で起きていることのほうが虚構の世界よりも劇的であるということも言える。だとすれば、今犀の角を会場として「のきした」で起きていることは、最も注目すべき演劇なのだ。そして、劇場（芸術）とは、ごく一部の舞台（芸術）に興味のある人のものではなく、あらゆる困りごとを抱えた人たちが生き辛さに悩むすべての当事者を含む、社会全体のものであるとも言えそうである。さらに言えば、従来の「劇場」ではない、「何か」に確実になりつつあるように思う。そこにふさわしい名前はまだ付けられていない。

犀の角・一般社団法人シアター&アーツうえだ

荒井洋文

上田市出身。2016年、演劇等で使用できる劇場とゲストハウスを備えた民営文化施設「犀の角」を創設。様々な表現活動や地域住民・アーティストの交流の場として運営している。一般社団法人シアター&アーツうえだ代表理事。

永猫猫 湖抱我 たそ人た そた賭我現奪我 我そ嚙肉つ 至吸冬た 猫
遠をを 底きは めの生か のかしはれうが はのみ球る るい毛わ 猫
の嚙吸 にし猫 に猫をが たが闘全ば者猫 溶弾てをり 幸たのわ 猫
中むい 沈めの の賭我 め猫うて を け力 甘し せる猫な 嚙
む 骸 けが に を るに くと 我をる み

表現時評

「犬神家の一族」
横溝正史生誕 120 周年公演
鎌ヶ谷アルトギルド 一徳会+犀の角
公演日：2022年12月3日・4日 原作：横溝正史/脚色・演出：石井幸一
出演：丹野晶子、櫻内華恵、鈴木正孝、戸崎真、中村岳史、月影瞳（特別出演）

美しい舞台であった。まるで湖底に設えられた応接室のような、あるいは鏡張りの監獄のような冷たく残酷な真実を切り取ったある一族の歴史と悲劇を、120分に凝縮したかのような濃厚な悲しみと、深すぎる愛ゆえの過ち。その一部始終を醜陋しながら目撃したのだ。あの日、あの椅子で。



TEXT=観客・GOKU



作：LenniY (レニー)

表現未満日和

海野町商店街の一角で子ども若者たちの賑やかな声が響く日がある。犀の角を中心に展開している「うえだイロイロ倶楽部」の活動の日だ。参加メンバーは6～18歳のイロんな子たち40名弱。年齢も学区もバラバラ、国籍も障がいも関係ない。関わる大人もイロイロ。演劇や音楽、アートに関わる人、福祉や医療に関わる人、商店街の人、大学や高校に通う学生、会社勤めの人、犀の角にくるお客さん……。まずは出会う。遊びを通して、お知り合いになる。そして、子どもや大人というレッテルをちょっと外して、ひとりの人間として対話する。大事にしたいのは彼らの声。まだ明確な言葉としての表現には満たない事が多いけど、確かに「やりたい」「いやだ」は存在していて、小さな態度にも人間らしさが滲みでる。「なにやりたい?」「どう過ごしたい?」「いっしょにやってみよう」限られた時間の中でできる限り動き回る。私はひとりの人間で彼らもひとりの人間だから、教育やケアのプロじゃなくても隣に居ることができる。それぞれが持つ表現未満を見つけて、認めて、試したい。やれるだけの何かを一緒にやって、失敗したいし、喜びたい。

犀の角 / うえだイロイロ倶楽部
伊藤茶色

1992年生まれ、上田市丸子町出身。2013年より地域劇団の活動を経て、企画運営・照明スタッフとして2017年から犀の角に参加。2021年からスタートしたうえだイロイロ倶楽部で地域の子どもの若者達と過ごしたり、障害をもつメンバーと表現活動をするリベルテにスタッフとしても関わる。のきしたを通じて演劇を再認識する中、自宅を地域にひらく準備中。

うえだイロイロ倶楽部 とは・・・

地域に暮らす子ども若者たちが地域の劇場や映画館など芸術に関わる場でイロんな大人と出会いながら、自分の興味関心に基づいた発想を軸に自由に活動しています。これまでに劇であそ部、ダンボール部、まちなか探検部、ことば部、落書き部、焚き火部などユニークな部が誕生しました。大会などで成果を求めることよりも一人ひとりの「やってみよう」を尊重して自分らしい表現を発見出来ることを大切にしています。



SAI NO TSUNO -play theater-

犀の角 / シアター&アーツうえだ

〒386-0012 長野県上田中央2丁目11-20

MAIL: info@sainotsuno.org

TEL: 0268-71-5221 営業時間: 7:30-10:00 / 16:00-21:30 月曜定休



映画館の新しい過ごし方

平日の昼間、学校に行く時間に子どもたちが映画館で映画を観ている。館内に併設されているお洒落なコーヒー店「重澤珈琲」のスペースは、その日はコミュニティカフェに様変わりし、子どもたちがポップコーンを食べたり、絵を描いたり、ゲームをしたり、ジュースを飲んだりして自由に過ごしている。月に2回、月曜日に開催している「うえだ子どもシネマクラブ」の上映会の日、普段の上田映劇とはちょっと違う。別の曜日には、別館トラウム・ライゼの受付周りで、子どもたちがこれから上映する作品のチラシに上映日のスタンプを押している。週末には、翌日から入れ替えになる作品のポスターの貼り替え作業を中学生が手慣れた様子でこなしている。一通りの作業が終わると、みんなは事務所でお昼を食べたりおしゃべりしたり。小学生から20代の若者まで、本当に幅広い多種多様な人たちが映画館で過ごしている。

“学校に行きづらい日は映画館へ”のキャッチコピーとともに、2020年からはじめた「うえだ子どもシネマクラブ」。ここでは学校に行くのをやめてしまった子どもたちだけでなく、社会で過ごすのにちょっと疲れてしまった若者や大人たちにも場を開いている。みんなと話していると、「映画館だから来やすい」のだという。これはとても興味深い一言だ。



映画を通じていろんな世界を知ってしまった子どもたちは、もうガチガチの日本社会の枠に囚われていない。悩んでいる様子はあるけれど、あまり焦っていないのである。彼らは表面をすくうだけのハリボテの世界を見抜いて、スクリーンのその先に描かれた世界のリアルを捉えようとしている。だから、問題が簡単に終わることがないことも、よくわかっているし、悩みと不安に襲われながらも、でもそういう時こそ映画の台詞に救われたりして、その日が無事に1日が終わっていくことに安心している。

世界を瞬時に捉えた映画や、心の中をひっぱり出されたような映画、または踊るように描かれた映画に出会う時、私たちの心は少しずつ動いていく。世界を知る時間であると同時に、自分自身を探究する時間でもある。まだ見たことのない自分に出会うため、そんなゆったりと大切な時間を映画館で過ごして欲しいと切に願う。

うえだ子どもシネマクラブ / 上田映劇
直井 恵

1978年、上田市生まれ。アジアに憧れる青春時代を経て、フィリピンで活動する国際協力NGOに就職。主に開発教育・国際理解教育を専門とする。2007年に出産を機に上田に戻ったのちも、映画や音楽や祭り、文化で世界に触れ、交流する市民企画を行う。いろいろ経て2016年から上田映劇の再起動に関わり、2020年から「うえだ子どもシネマクラブ」を始めることになる。

うえだ子どもシネマクラブ とは・・・

学校に行きにくい・行くのをやめてしまった子どもたちのもうひとつの居場所として映画館を活用する取り組みです。学校でもお家でも塾でもない、「映画館」という場所で、世界のどこかの物語や、広い地球の話、ときどき、胸の奥に潜む言葉にならない想いなどについて、映画を観ながら語り合える機会を作っていきます。映画を通じた学びはとても自由で想像的です。私たちの探究心や感性、何よりも生きる楽しさを育む学びとしてぴったりです。

学校行きづらい日は
映画館へ行こう！



↑登録フォーム

↑上映作品など



始まりへ

商店街の裏の路地の角、定刻に容赦なく語り始める老父や馬の嘶きは、ここでないどこか。

旅の道中、あれはセピアの聖堂。なぜか近寄り難く、戸惑い彷徨う彼女。雨に濡れたどんぐりに微笑み、安堵したようにその香りを掬って細い手首に付けた、救いを請う為か。よく通る叫び、また曇天のように生ぬるく柔らかいバイオリンらの寄り添いは、私の今日に似ていた。

スクリーンが少年を出す。秘密をばらさないでくれと白菊の蕾のようなその奥歯を強く噛み今日や明日を鋭く案じて黙るのに、星は輝いてしまう、冒険の終わりみたいに、祝うように…。

一人黙々と歩いて、半ば勝手に暮れていく物語。その心地良い知らん振り、尚も尊いゼンマイ仕掛けの青い鳥を求めて行く。

帰りたと思った、いくつかの話を持って。小川の向こうは藍鼠色の拙い教会。傍から見ると枝葉末節の滝壺であるものの、自身への憂いに耐え兼ねて、今日もここを目指し無理に目を覚ます者がいる。あわよくば誰かに出会いたいと思った。

街は雨。二人は月影に眠る。木々は揺れる、まだ何か言いたいことがあるのだろうか。

眠った為を開いた心、彼は私が思うよりずっと若い。まだやがて吹きつける風の甘さも知らず、再び何かを祈っている。

すぐそこでアルプスの麓の吹きさらしが、宵の水平線を見つめた些細な英雄の後ろ姿が、彼を浄める時、身に生じる痺れは至高だろう。彼はこれからも共に生きて行く。

そんな夢をずっと見たい。

沓掛 滉

2004年生まれ。2021年秋より「うえだ子どもシネマクラブ」に通っている。自分の中から出てくる率直な言葉で、美しく興味深い文章を求め、日頃から詩作を嗜んでいる。また音楽や映画鑑賞が好きで、詩作に加え趣味程度に音楽制作も行う。今回は『“映画”から見た僕たち』を日頃映画から貰う恩恵へのお礼として描いてみた。





いつかの「今」が照らすその場所で／へ

福祉施設の枠組みの矛盾をただ歩き踏み越えるための試行

1977年4月12日、「全国青い芝の会連合会」の呼びかけで始まった「川崎バス闘争」。当事者60名ほど（支援者もいれば100名）が川崎バスターミナルに集まり一斉にバスに乗り込んだ。

2022年9月25日、『花とひろく～路地をひらき、ちんどんパレード～』をリベルテは信州アーツカウンシルの助成も受け実施した。2021年の春から始めたリベルテの日常を、施設を地域に開いていこうと始めたアートプロジェクト「路地の開き」の企画として市街をパレードした。この企画は僕たちが「アトリエ roji」と呼んでいる建物の庭を「地域と施設の紐帯」、交わる可能性がある場所として捉えて地域の人と一緒に庭づくりをしようというところから始まった。去年は庭のデザインや土木作業のワークショップには和久井ガーデン代表の和久井道夫さんに携わっていただいた。その庭へと2022年2月に「のきしたおふるまい」パレードで犀の角からリヤカーを引いて沢山の人が訪れてくれた。今回はその逆ルートをリベルテの企画で歩いた。

出発場所の roji には参加者が50名集まり小さな庭には入りきらず急遽、ご近所の広い敷地をお借りした。リベルテのメンバーがアトリエで作成しているお面の作品やのきした時間銀行ひろくにも協力してもらい作った羽をつけ、メンバーが塗った木材を飾ったリヤカーを先頭に列を成して歩いた。それ以外、これといったルールはなく、思い思いに「パレード」を表現して歩く。シュプレヒコールもなければ、プラカードもない。パレードと言うより沢山の人が淡々と歩く遠足に行くような雰囲気でもある。楽器や歩く人の会話など、音や人に触発され踊るメンバーもいる。家族が待っている休憩地点を目指すメンバーもいれば、ベビーカーや子どもの手を引いて目的地である犀の角まで歩いてくれた一般参加者もいる。パレードではこの日のために小諸市の駐車場ガーデンの協力で頂いた生花をドライフラワーにして、道行く人や普段関わりがあり渡したい人に手渡していった。

映画『遠足 Der Ausflu』では、精神障害のある人たちが医療やケアを受け共同生活しているウィーン郊外にある「芸術家の家」という「ホーム」からプラハへ出張した展示会へ出かける「遠足」が描かれている。劇中「ホーム」から近所にある雑貨屋にクジを引きに行くことが日課のオズワルド・チルトナーさんという人物が出てくる。国外の展示会にでかけるような特別な遠征と日常的に施設外に出かける散歩が「ホームから出かける遠足」の対比としてとても印象的な場面だ。クジを引きに行く彼にとっては遠征とそれは同じ価値の日常だと僕は感じ、精神障害や知的障害がありフラットな日常を受け入れていることと、日常の中にあり小さな日課に幸せを感じる彼へ、静かな幸福感とそれ故の切なさを感じた。

パレード当日、企画者として、一参加者として参加しながら、歩きながらぼんやり思い浮かべたことは恐れ多くも青い芝の会の「川崎バス闘

争」だ。川崎バス闘争は、車椅子での単独乗車に対する乗車拒否に端を発する。1972年4月12日、全国青い芝の会の脳性まひ者60人が川崎駅前に結集して30台のバスに乗り込んで抗議活動を行ったのだ。僕は人がひとつの場所に集まること、その意味について歩きながら考えた。あの時の「今、ここ」に集い参加した人たちはどんな思いや感情を懐き路上に集まっただろうかと。

この企画は何か公共に対する異議申し立てを目的としたデモとして企画した訳ではない。そうではなかったが、しかし個人として現状の社会や福祉の有り方に異議がない訳でもない。社会への異議申し立てを行動化することと、リベルテが行っている運動的な側面と、社会福祉施設としての役割や機能面と、「アート」と仮に名付けてアトリエでのメンバーやスタッフとの営みから生まれる物事や出来事に対する継続と運営の課題と、アトリエに集うメンバーや地域からの参加者と、様々な思いの中に自分もいる。

サービスとしての福祉が整い「利用者本位」という言葉は支援者もつぶやけるようになった。このような企画はもしかしたら「本人が参加したいと思っているの?」「それって何か(生産性)あるの?」と「支援者」からサービス自体がはらむ矛盾を顧みず言うかもしれない。このような企画は福祉施設ではいよいよ難しくなっている。大きな集団や数にすると見えなくなる「ひとりのひと」に対して、いつも軸をどこに置くかという難しさや矛盾は、ケアの仕組みの中にもある。「ただ歩くこと」が、いつもの風景の中での人と新たな／改めてに出会うこと(出会い直し!?)のアクションとして、一人ひとりの表現や夢が立ち上がり開かれる機会を施設という枠組みを外し実現していけるかではないか。

そんなことを考えていたとき、ふと視線を目の前に移すとメンバーのジョニーさんと和久井道夫さんが並んで歩いている。ジョニーさんはハーモニカを吹き、和久井さんはウクレレを弾いて歩いている。太陽に照らされた道で前を向き歩く。音がなり、会話を交わす。踊る人も出てきて、人と出会う。あの日、路上で何を思い集まっただろう。チルトナーさんは日課の雑貨屋を目指し歩きながらつぶやく「すべてに幸あれ」と。路上での出会いがまたいつかの「今」を照らし出しますように。

¹ (監督・編集:五十嵐久美子/1999年/日本/86分)

特定非営利活動法人 リベルテ / 武捨和貴

シャム/ロジョウ科ヒトシリ属サビエンス/妻、子2人、猫とアガベや宿根草を軒下で愛でて暮らしている。アトリエをリベルテとすっかり名付けてしまったばかりに、自由の矛盾を植え床に、集う人によって多様な人と表現のピエトープが形成され、そこに自らも棲息する。



photo: 藤澤 智徳 (信州アーツカウンシル)

わたしのものがたり ことばとひょうげん



のきしたで出会った
みんなのコラム



花非花

人間を植物に喩える人がいる。例えば「人間は考える葦である」「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」「竹を割ったような性格」……ときに柔らかく、ときに弱々しく、ときに力強い植物の特性が、人間の気質や容姿などの特徴を表現するために使われることは多い。その中でも今回は特に私の印象に残っている言葉があるので紹介したい。

「置かれた場所で咲きなさい」

意味合いとしては「置かれた場に左右されるようでは環境の奴隷でしかない。人間として生まれたからには、どんなところに置かれても、そこで環境の主人公となり自分の花を咲かせよう」ということらしい。

なるほど。真っ当な意見に感じる。環境を選べる人なんてごくわずかで、この世を生きる多くの一般市民が、自分の能力や家庭環境や家計のこと、諸々の事情をのみこんで、今の環境で生活しているのだと思う。その中でうまくいかないことを環境のせいにするのはやめて、適合できるよう努力して実を結びなさいと。この言葉を考えた人はどうやらそう言いたいらしい。でも失礼を承知で言いたい。

人間は植物ではない。

人間が場に「置かれる」という表現は、ありえない。

転職や結婚、病気などあらゆる事情で、選べなかった、そうするしかなかった、ということはあるだろう。でも実際は、人間は、自分の身を置く環境を、選ぶことができる。元々備わった力や、道具や他人を使って、あらゆる手段で、今いる場所を移動することができる。

私たちは人間である。

必死の努力が実を結ばなかった土地に、責任を感じる必要はない。所属する場所に自分の価値の全てを「置かなくて」もいいのだ。会社や学校と家を往復する生活で、他の環境を見つけるのは難しいだろう。しかし、本の中でも音楽の中でもインターネットの顔も知らない人間の中ででもいい。あなたが身を置くに値する場所が実はこの世に無数に存在していると信じてほしい。あなたは人間だ。好きな場所で生きることができる。

うめかり

東京都墨田区出身。昨年四月に上田市を訪れ、五月に移住。おいしいごはんスイーツをこよなく愛する。好きな映画は『マルホランド・ドライブ』。上田映劇で観て良かった映画は『November』。

星よ繋げて。

「本日の『ふたご座流星群』は、15 日午前 3 時をピークに観測できるでしょう。」

2007年12月14日。初めて宇宙に興味を持ったのはこの時だった。

当時、中学生だった僕は流星群のことを深夜のニュースで初めて知った。僕は我慢できず部活用のウィンドブレーカーを羽織り玄関を飛び出した。街灯のない場所を探して星の明かりを頼りに農道を走った。真冬の冷気で息が白くなったが全然寒くなかった。数キロ離れた貯水湖に着くと僕は小高い丘に登って夜空を見上げた。無数の瞬きを見せる夜空はいつもより遠く、鮮明に、そして美しかった。不意に流星がオリオンの頭上を駆け抜ける。

あ、流れ星！彼のあとを追うように双子のあいだを星が跨いだ。

それから流星は星空を何度も渡り歩いた。

僕は時間を忘れて星の軌跡を追いかけた。しかし次の登校日、友達も先生も誰も流星群を話題に出す人はいなかった。みんなは星に興味がないんだ…。少し寂しい気持ちになった。それ以降、宇宙のことは僕ひとりの密かな楽しみとなった。

そしてつい先日のことだった。

僕は上田映劇で開催されているこどもシネマクラブにスタッフとして参加していた。ある男の子が読んでいた一冊の本が目止まった。それは2010年頃に話題になった小惑星探査機「はやぶさ」についての本だった。「宇宙が好きなの？」男の子は小さく頷く。そのあとすぐ男の子は友達に呼ばれてカフェを後にした。あの子も宇宙が好きなんだ！短い会話だったけど、僕はとても幸せな気分になった。このワクワクを誰かと共有できたことが僕は嬉しかった。現在、アメリカでは人類を月へ届ける通称「アルテミス計画」が進行している。順調に行けば2025年には人類が再び月へ降り立つ予定だ。僕はその瞬間をワクワクしながら待っている。もしかしたらあの子も、僕の隣にいる「誰か」も同じ気持ちなのかもしれない。僕はもう少し、宇宙について誰かと話してみようと思った。

館山大樹

長野県佐久市出身。ながの若者サポートステーションからの紹介で上田映劇のボランティアスタッフに。SF作品、カポエイラ、筋トレがマイブーム。目指せ懸垂一回！



うえだ子どもシネマクラブと
うえだイロイロ倶楽部
クラウドファンディングに挑戦中!!!



うえだ子どもシネマクラブ



うえだイロイロ倶楽部

“信州の特色ある学び”を応援するために、長野県みらい基金と長野県が協同した活動資金を集めるための公共的活動応援・ファンドレイジングプログラムがはじまり、うえだ子どもシネマクラブとうえだイロイロ倶楽部も登録させていただいています！こちらの「長野県みらいベース」から、一口1000円からのご寄付をお受けさせていただいています。(何口でも大歓迎!!!!)

それぞれの寄付サイトは
こちらのQRコードから！



拝啓 あこ様

なんだってあんなに頭に血が上ったのか、もう、よく思い出せないわ。多分あなたが、パンツの見えるツツルツツルのスカート履きたいと駄々をこねたとか、箸で遊んで穴だらけにした目玉焼きを食べ残したとか、きつとそんな、いつも通りの騒ぎね。あなたももう、すっかりそんな出来事など忘れた頃かしら。それともまだ、心の中で一人泣いているのかしら。

母さんはあれからヤドカリさんをお願いして、いつものお部屋を取ってもらって、荷物をまとめて、お家を出て来ました。

ヤドカリさんにお借りする朝はいつも、一刻を争う事のように思うのです。早くお家を出なければたまらないと思うのです。けれど、荷物をまとめて夕方を待っているうちに、母さんはいけない事をしてる気がして来て、段々と気が重くなります。

ここにはお布団が一式、白熱灯の灯りが一つ。ハンガーが二つ。小さな窓が一つ。あとは母さんの大きな鞆が二つあるきり。カーテンを閉め切って灯りを点けると、なんだか、お船の底か、寝台列車のキャビンに寝ているような心持ちになります。窓の外は段々と夕暮れて、太郎山の方の空が藍色に沈んでゆきます。やがて夜が来て、そしてまた明け始める頃。母さんはどこか、遠い遠い、知らない土地へ運ばれてゆかれています。そうじゃないかしらん。そんなふうに夢想します。

皆は色々な事を言うでしょう。

あなたを置いて母さんがここへ逃げてくるのは、頭を冷やして反省するためだとか。病気が落ち着くまで療養が必要なのだとか。

けれどもここへ来る時、母さんの願いはただ、単純な一つの事です。遠く遠くへ逃げたい。それだけの事です。

あなたの前にもまた、どこまでもどこまでも逃げてゆける広い世界が広がっている事を、私は願ってやみません。

母さんが帰るまで、父さんとおばあちゃんの言うことをよく聞いて。寒くないようにきちんと腹巻きをして寝てください。

母より



のきした journal

発行：のきした（NPO 法人場作りネット）編集・デザイン：直井恵
発行部数：4000 部 発行日：2023.2.3
助成：本事業は、（一財）中部圏地域創造ファンドの「新型コロナウイルス対応緊急支援事業 2021」として休職預金を活用した助成を受けて実施しています。



（編集後記）ようやく「のきしたジャーナル」を創刊することができました。のきしたの取り組みと同様に、この紙面媒体も作りながら試行錯誤する日々。何を伝えるべきなのかと話をしながら数ヶ月がたち、ぼつぼつと集まってきたテキストをあれこれ置いていながら、「ああこういうことか」とひとつひとつ納得しながらまとめていきました。私の中ではこれは社会に対する抵抗運動でもあって、それは今回ここに登場した団体たちが、見事に本来の姿かたちを語るのではなく、日々起きていることや新たな役割を示してくれていることにも繋がっています。同時にこれは文化芸術や表現の本来の力を取り戻すための出会い直しだろうなとも思います。これからも、行き交う人たちと、たくさんの言葉や表現のやりとりができれば嬉しいです。背表紙には、やどかりハウスを利用する女性の寄稿を掲載させていただきました。原稿が届いて、静かに圧倒されました。言葉にはやっぱり力があることを示してもらった感じがしています。読んでいただいた皆さまの感想などもお待ちしております。（なおい）